

ハンガリー動乱50年：ソ連共産党とカーダール政権

盛田 常夫

1956年11月1日、カーダールはブダペストから忽然と姿を消した。彼が再びブダペストに現れるのは、3日後の11月4日である。未明にモスクワからソルノークに到着し、そこからソ連の戦車に乗って、ブダペストに入った。

いったい彼に何が起こったのだろうか。この数日間のカーダールの行動は、長期にわたって秘匿され、カーダール自身もけっして口外することはなかったが、ソ連共産党政治局資料が公開され、全容が明らかになっている。

カーダールは自ら進んでモスクワに向かったのではなく、事実上、ソ連に拉致されて、モスクワに連行されたのだ。11月1日、当時の在ハンガリーソ連大使アンドロポフは、カーダールとミュニツヒ・フェレンツを大使公邸に招いた。そこでどういう会話が交わされたのか分からないが、この招聘は最初からこの2人をモスクワに連行するためのものだった。その日のうちに、マーチャーシュフリユドのソ連軍基地からウクライナ領を経由して、モスクワに連行され、翌2日にソ連共産党政治局の会議に、この2人が立たされることになった。

先を急ぐ前に、ソ連共産党と中東欧諸国の共産党との当時の関係を知っておく必要がある。

ソ連共産党の影響力

第二次大戦後、ソ連が占領駐留した中東欧諸国では、ソ連共産党の強力な支援によって、次々に社会主義政権を樹立し、複数政党制を廃止し共産党の単党支配を生み出した。社会主義の総本山ソ連の最高指導部は、共産党政治局である。中東欧諸国の国家運営にかかわるすべての重要決定は、ソ連共産党政治局の討議を通じて、各国の共産党指導部に伝達された。

ソ連共産党と中東欧諸国の共産党を繋ぐパイプ役を果たしたが、ソ連帰りのエリート党员だった。ハンガリーではラーコシ・マーチャーシ

ュが、ソ連共産党の意思を体現するカリスマであった。

社会主義者と社会主義国にとって、ソ連共産党の権威は絶対である。これに逆らうことなど、共産党员にとって考えられないことだった。したがって、ソ連共産党の威光を背にするラーコシの権威もまた、ハンガリー共産党（労働者党）では絶対的で、そのラーコシがスターリンの歓心と庇護を狙って仕組んだ姦計が、ライク事件である。

動乱の混乱の真っ只中、事前の準備もなく、突然に世界共産主義運動の総本山クレムリンに連行されたカーダールの心中は穏やかなはずがない。どのように振る舞うべきか。どのように主張すべきか。事前の準備のないカーダールの主張が揺れ動き、矛盾に満ちたものだったとしても、誰も責められないだろう。フルシチョフはカーダールの事情をよく理解し、クレムリンの保守派はカーダールを嫌っていた。

ソ連共産党政治局の内情

1956年は、ソ連共産党史においても歴史を画期する年である。2月に開かれたソ連共産党第20回党大会において、フルシチョフ書記長は長時間にわたる「秘密報告」を行った。これがいわゆる「スターリン批判報告」である。ほどなくこの「秘密報告」は西側の通信社を通して、全世界に配信され、大きな衝撃を与えることになった。この「秘密報告」が契機となり、中東欧諸国の共産党内部に大きな変動が生じた。

ハンガリーではスターリンの「忠実な優等生」を自認するラーコシの罪状が暴露され、ラーコシ一派の追放が行われた。それによって共産党内部の勢力関係は逆転し、ナジ・グループの勢力復活とカーダールの党指導部への復帰が決定された。共産党における変化を感じ取った反体制派が、ライク埋葬式から街頭行動に移つ

たのが56年動乱である。明らかに、ソ連共産党における「スターリン批判」という契機を抜きに、56年動乱を語ることはできない。

しかし、総本山ソ連共産党政治局は、反スターリンの一枚岩でまとまっていた訳ではなかった。フルシチョフ書記長のスターリン批判を「行き過ぎ」と考える保守派が、政治局の多数派を形成していた。それがあらゆる事態を複雑なものにした。

カーダール擁立をめぐる抗争

ラーコシ派に不信を抱くフルシチョフは、カーダールを軸に臨時政府を樹立する方向を固めていたと思われる。しかし、事は簡単に進まなかった。フサル・ティボールの近著（Kadar A hatalomevei 1956-1989, Corvina, 2006）によれば、カーダールがクレムリンの場に呼び出された11月2日、フルシチョフはマレンコフとともにユーゴスラビアに滞在しており、最初の聴聞はブルガーニンが議長役となり、「ハンガリーの事情に詳しいミコヤンとスースロフ」、「（フルシチョフ）第一書記と対立関係にあるカガノヴィッチ、モロトフ、ノヴォシロフ」が参加したとある。

この時、別のルートを経由して、ゲルー・エルヌーとヘグドゥシュ・アンダラーシュ（元首相）、ピロシュ・ラースロー内務大臣、バタ・イシュトヴァーン防衛大臣がモスクワに到着し、彼らにナジ政府に代わる政策プログラムの立案が任された。他方、ソ連に亡命していたラーコシはソ連共産党政治局に請願書を提出し、カーダールはナジー派であり、指導者として相応しくないと主張し、自らの復権を訴えていた。

この聴聞会ではハンガリー情勢の検討が行われたが、カーダールがナジ政府の一員のごとく振る舞ったことに保守派が苛立ち、ここからモロトフはカーダールではなく、ミュニッヒを擁立すべきだと強力に主張するようになった。

翌3日の午後にモスクワに戻ったフルシチョフはすぐに会議に加わり、ミュニッヒを推すモロ

トフの意見を聞いたが、それに納得せずに2人から一緒に意見を聞こうということになった。

当時のソ連共産党政治局ではフルシチョフ反対派のモロトフ一派はカーダールを嫌い、ミュニッヒのようにソ連での亡命生活経験がある党員に親近感を抱いていた。それに抗して、フルシチョフがカーダールに拘った理由は何だったのだろうか。

ひとつは、フルシチョフの優れた政治感覚である。旧ラーコシ派は人間的に信頼できないと考えており、彼らでは政権がもたないと判断したのだ。二つは、臨時政府を作るにせよ、ある程度の政府の継続性がないと、国民を説得できないだろうという判断である。継続性を示す上で、ナジ政府の一員だったカーダールは適材だったのである。

この二つの判断は正しかった。現実的政治家フルシチョフの面目躍如たるものがある。

しかし、カーダールには動乱における役割とは矛盾する役割と機能を負わされることになり、生涯にわたってこの矛盾を妥協的に政治処理する道を余儀なくされたと言えよう。

フルシチョフの判断は揺るがなかった。彼はカーダールを説得し、「社会主義権力の存続のために必要だ」と諭され、延々と続いた11月3日の会議の終わりに、カーダールが政府首班の役割を受諾することになった。

政治局ではカーダールを評価しない政治局員が多数を占めたが、カーダール以外に当面の顔が存在しないことも事実であり、ソ連政治局の多数を占める保守派は、あくまでカーダールをリリーフ役として登板させることに同意したと考えられる。

カーダールに対するフルシチョフの信頼は、これ以後、カーダールの唯一の拠り所となった。カーダールは政府首班を受諾する弁論で、「56年動乱のもっとも深い原因は、ソ連共産党が12年間にわたってラーコシとゲルーに支配の特権を与えたことにある」とこれまでのソ連共産党の行動を批判した。その思いは生涯変わらなかった。

ハンガリー占領体制

ソ連の戦車によって鎮圧された56年動乱は、ハンガリーにソ連の軍事的占領支配体制を樹立することになった。占領体制は3つのレベルから形成されていた。

ひとつは、司令本部である。ブダペスト郊外のレアーニファルにある社会主義労働者党の幹部用保養施設に、ソ連共産党の最高司令部が設置された。マレンコフ政治局員が最高司令官となり、中央委員会書記のスースロフとアリストフが側近として配置され、ソ連共産党の意向はすべてこの司令本部からカーダールに伝えられた。ユーゴスラビア大使館に立てこもったナジ・グループを誘い出し、ルーマニアに送還する行動方針も、ここから発せられた。

第二は、軍事的な占領体制である。ソ連のコニェフ大将率いる師団が、ハンガリーをいくつかの直轄地域に分けて、占領統治した。

第三は、ソ連軍の地区軍事司令官が区域の政治・経済管理を行えるように、40-50名の専門家集団が送り込まれた。このいわば諜報活動を指揮したのは、セロフKGB長官である。セロフはハンガリー内務省国家保安局（ÁVH）の要員を再編成して、諜報活動を行った。

カーダールはセロフから、軽微な罪状の市民を早急に釈放するという約束をとったが、これは空手形だった。ラーコシ政権下で多数の政治家や市民を拘束し、拷問を加えた保安局の要員が、今度はKGBの指揮のもと、動乱に参加した人々の摘発の仕事を引き受けることになったのだ。ソ連軍は動乱参加者やソ連軍に反抗した者をシベリアにも送ったようだが、その詳細は明らかでない。

こうして、無政府状態になったハンガリーにカーダールを首班とする名前だけの臨時政府が樹立されたが、事実上はソ連による軍事占領体制が築かれたのだった。ソ連共産党とソ連軍・KGBに囲まれ、ほとんど孤立無援の状態、カーダール政権が発足した。まさに傀儡政権そのものであった。

ソ連の軍事占領状態から抜け出し、カーダールが自らの権力基盤を築くためには、まだ長い時間が必要だった。

ソ連共産党政治局クーデター

カーダールの最大の課題は、動乱によって解体された党と国家体制の再編成である。動乱の事後処理はいわば裏と表の二つの方向から行われた。

裏の仕事は、動乱に積極的に参加した者の拘束と処分である。これは事実上、KGBに指揮された国家保安局が、カーダールの意向とは独立して実行された。表の仕事はカーダールに課せられたもので、党と国家機構の再編成である。

そして、このちょうど境に位置するのが、ナジ・グループの処分である。ナジ・グループは1957年4月17日にハンガリーへ移送され、すぐに逮捕・拘束された。この移送もソ連が決めたことであるが、カーダールの役割はナジ・グループを訴追し、適切な処分を下すことだった。カーダールにとって、ナジへの判決と処分は、動乱を収束させるための最後の仕事だった。しかし、ナジ・イムレ他の処刑が行われる翌年6月まで、内外の情勢に翻弄される日々が続いた。

1957年6月17日、モロトフとマレンコフはソ連共産党政治局会議で、行き過ぎたスターリン批判を理由に、フルシチョフ解任決議を提案した。政治局員の多数がこれに賛成する中、ミコヤン、スースロフ、キリチェンコが反対し、議決権をもたないブレジネフとジュコフも反対に回った。KGBをバックにもつジュコフが立ち回り、逆に中央委員会でマレンコフ、モロトフ、カガノヴィッチを失脚させ、他の政治局員を格下げすることで、フルシチョフ解任の試みが失敗に終わった。

マレンコフの占領本部は56年12月に引き揚げ、ソ連の監視が平時のKGB支配に移り、カーダールの政策決定自由度は広がっていたが、ソ連共産党政治局の保守派の退却は、さらにカーダール政権自立への転機となった。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)